

# 杜子春

芥川龍之介

青空文庫



或<sup>ある</sup>春の日暮です。

唐<sup>とう</sup>の都洛陽<sup>らくよう</sup>の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春とって、元は金持の息子でしたが、今は財産<sup>つか</sup>を費い尽して、その日の暮しにも困る位、憐<sup>あわれ</sup>な身分になつてい  
るのです。

何しろその頃洛陽といえは、天下に並ぶものがない、繁<sup>はん</sup>昌<sup>じやう</sup>  
を極<sup>きわ</sup>めた都ですから、往来にはまだしつきりなく、人や車が通つ

ていました。門一ぱいに当っている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗しやの帽子や、土耳其トルコの女の金の耳環みみわや、白馬しろうまに飾った色系の手綱たづなが、絶えず流れて行く容子ようすは、まるで画のよう  
な美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭もたせて、ぼんやり空ばかり眺ながめていました。空には、もう細い月が、うらうらと靡なびいた霞かすみの中に、まるで爪の痕あとかと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れ

ない」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目すかめの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。

「私わたしですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それは可哀そうだな」

老人は暫くしばら何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中よなかに掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金おうごんが埋うまっている筈はずだから」

「ほんとうですか」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げあました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも猶なほ白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の早い

蝙蝠こうもりが二三匹ひらひら舞っていました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一ただ一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家うちを買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅ぜいたく沢たくな暮しをし始めました。蘭陵らんりょうの酒を買わせるやら、桂州けいしゅうの竜眼肉りゅうがんにくをとりよせるやら、日に

よたび  
四度色の変る牡丹ぼたんを庭に植えさせるやら、白孔雀しろくじやくを何羽も放し  
飼いにするやら、玉を集めるやら、錦にしきを縫ぬいわせるやら、香木かうぼくの  
車を造らせるやら、象牙ぞうげの椅子あつらを誂あつらえるやら、その贅ぜい沢を一々書  
いていては、いつになつてもこの話がおしまいにならない位です。  
するとこういう噂うわさを聞いて、今までは路みちで行き合つても、挨あいさ  
拶つさえしなかつた友だちなどが、朝夕遊あそびにやつて来ました。

それも一日毎ごとに数が増して、半年ばかり経たつ内には、洛陽の都に  
名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、  
一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客さかんたちを  
相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又また盛さかんなことは、  
中なか々なか口には尽つされません。極ごくかいつまんだだけをお話しても、



杜子春が金の杯さかずきに西洋から来た葡萄酒ぶどうしゆを汲くんで、天竺てんじく生れの魔法使が刀を呑のんで見せる芸に見とれてしていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠ひすいの蓮はすの花を、十人は瑪瑙めのうの牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節ふし面白く奏していると、いう景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありませんから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日きのうまでは毎日来た友だちも、今日は門の前を通つてさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そう

という家は、一軒もなくなつてしまいました。いや、宿を貸すどころか、今では椀わんに一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つていました。するとやはり昔のように、片目眇すがめの老人が、どこからか姿を現して、「お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているので」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが**いい**ことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが**いい**。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」

老人はこう言つたと思つたと、今度もまた人ごみの中へ、**か**掻き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、**たちま**忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱい**おびただ**にあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばか

り経つ内には、すっかりなくなつてしまいました。

## 三

「お前は何を考へているのだ」

片目すがめ眇の老人は、三度どとししゅん杜子春の前へ来て、同じことを問いか

けました。勿もちろん論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそ

と霞を破つている三日月の光を眺めながら、ぼんやりたたず佇んでいた

のです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つて  
いるのです」

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれがよいことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るがよい。きつと車に一ぱいの――」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さえぎりました。

「いや、お金はもういらなのです」

「金はもういらない？　ははあ、では贅沢ぜいたくをするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」

老人は審いぶかしそうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想あいそが  
つきたのです」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳つっけんどん貪どんにこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞ついでごとも追お

従うもしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔やしい顔さ

えもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一  
度大金持になつたところが、何にもならないような気がするので  
す」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。

「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男

だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか」  
杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を  
挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子にな  
つて、せんじゆつ仙術の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠しては

いけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、  
ひとよ一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。

どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えて下さい」

老人は眉をまゆひそめたまま、暫くは黙つて、何事か考えているよ  
うでしたが、やがて又につこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉山に棲すんでいる、鉄冠子てっかんしという仙人だ。

始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、快く願ねがを容いれてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないものではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠おじ子に御時ぎ宜ぎをしました。

「いや、そう御礼などは言つて貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。——が、ともかくもまずおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好いい。おお、幸さいわい、ここに竹杖たけづえが一本落ちている。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るとしよう」



鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾い上げると、口の中に咒うち文じゆもを唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るよまたがうに跨またがりました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち竜のように、勢いきおいよく大空へ舞い上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆きもをつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕ゆうあか明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞に紛れたのでしよう）どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢びんの毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱うたい出しました。

あした朝あしたに北海に遊び、暮くれには蒼梧そうご。

袖裏しゆうりの青蛇せいだ、胆氣粗たんきそなり。

三たび岳陽くわくやうに入れども、人識しらず。

朗吟らうぎんして、飛過ひかす洞庭湖どうていこ。

#### 四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉さか山へ舞い下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空なかぞらに垂れた北斗の星が、茶碗ちやわん程の大きさに光っていました。元より人跡じんせきの絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっと耳にはいるものは、後の絶壁うしろに

生はえている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西せいおうぼ王母に御眼にかかつて来るから、お前はその間に坐つて、おれの帰るのを待っているが好いい。多分おれがいなくなると、いろいろな魔ま性しょうが現れて、お前をたぶらかさうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一ひとこと言でも口を利きいたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覚悟をしろ。好いいか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いました。

「大丈夫です。決して声などは出しません。命がなくなっても、黙っています」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨つて、夜目にも削つたような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に坐つたまま、しずか静に星を眺めていました。するとかれこれはんとぎ半時ばかり経つて、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透とおり出した頃、突然空中に声があつて、

「そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人のおしえ教通り、何とも返事をしませんでした。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇おどしつけるのです。

杜子春は勿論黙っていました。

と、どこから登つて来たか、爛らんらん々と眼を光らせた虎とらが一匹、

忽こっぜん然と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨にらみながら、一声高

く哮たけりました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈はげ

しくざわざわ揺れたと思うと、後うしろの絶壁の頂からは、四斗樽程しとだるの

白蛇はくだが一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来る

のです。

杜子春はしかし平然と、眉毛まゆげも動かさずに坐っていました。

虎と蛇とは、一つ餌食えじきを狙ねらつて、互たがひに隙すきでも窺うかがうのか、暫しばらくくは睨にらみの体ていでしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙きばに噛かまれるか、蛇の舌したに呑のまれるか、杜子春の命いのちは瞬またたく内に、なくなってしまうと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失うせて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄すさまじく雷らいが鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それ

と一しよに瀑たきのような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変なかの中に、恐れ気げもなく坐つていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉くつがえ山も、覆るかと思う位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴とどろが轟いたと思うと、空に渦卷うずいた黒雲の中から、まつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳そびえた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪いたずら戯に違いありません。

杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあろうという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉の戟を持っていましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を嗔らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしている所だぞ。それも憚らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。



しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然もくねんと口を噤つぐんでいました。「返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属けんぞくたちが、その方をずたずたに斬きつてしまおうぞ」

神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満みちみちて、それが皆槍やりや刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒おこつたの怒らないではありません。

せん。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ」

神将はこう喚くが早いか、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして蛾眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせています。が、杜子春はどうに息が絶えて、仰向けあおむにそこへ倒れていました。

## 五

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、あんけつどう闇穴道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がびゅうびゅう吹き荒すさんでい  
るのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木この葉のよ  
うに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿しんらでんという額がくの懸かかつ  
た立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐに

そのまわりを取り捲いて、階の前へ引き据えました。階の上には一人の王様が、まつ黒な袍きものに金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂うわさに聞いた、閻魔大王えんまに違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへひざまずへひざまず跪いていました。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上へ坐っていた？」

閻魔大王の声は雷らいのように、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答えようと思ひましたが、ふと又思ひ出したのは、

「決して口をきを利くな」という鉄冠子の戒いましめの言葉です。そこで唯頭かしらを垂れたまま、唾おしのように黙っていました。すると閻魔大王は、持つていた鉄しやくのしやく筋すぢを挙げて、顔中の鬚ひげを逆立てながら、

「その方はここをどこだと思おう？ すみやか 速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責かしゃくに遇あわせてくれるぞ」と、威い丈たけだか高ののしに罵りました。

が、杜子春は相変らず唇くちびる一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏かしこまつて、忽たちまち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、剣つるぎの山や血の池の外にも、焦熱地獄ほのおという焰の谷や極寒ごくかん地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春を抛ほうりこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれ

るやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵きねに撞つかれるやら、油の鍋なべに煮られるやら、毒蛇のうみそに脳味噌のうみそを吸われるやら、熊鷹くまたかに眼を食われるやら、——その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦せめくに遇あわされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま、一言ひとことも口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆あきれ返ってしまったのでしよう。もう一度夜よるのような空を飛んで、森羅殿の前へ帰つて来ると、さつきの通り杜子春を階きざこはしの下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う気色けしきがございません」と、

口を揃そろえて言ごんじょう上じょうしました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、

「この男の父ちちはは母ははは、畜ちくし生しょう道どうに落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて来い」と、一匹の鬼に言いつけました。

鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二匹の獣けものを駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえはそれは二匹とも、形は見すぼらしい瘦やせ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」

杜子春はこう嚇おどされても、やはり返答をせずにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いいと思つているのだな」

閻魔大王は森羅殿も崩くずれる程、凄すさましい声で喚わめきました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ」

鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭むちをとつて立ち上

ると、四方八方から二匹の馬を、未練未みしやく釈やくなく打ちのめしまし

た。鞭はりゆうりゆうと風を切つて、所嫌きらわず雨のように、馬の



皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になつた父母は、苦しうに身を悶もだえて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程いなな嘶いななき立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階きざはしの前へ、倒れ伏していたのです。

杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊かたく眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、殆ほとんど声とはいえない位、かすかな声が伝わつて来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さえ仕合せに

なれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何とおつしゃと仰つても、言いたくないことは黙つて御出で」

それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしよう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら

ら、「お母さん」と一声を叫びました。……………

## 六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇たたずんでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」

片目眇すがめの老人は微笑を含みながら言いました。

「なれませんが、なれませんが、しかし私わたしはなれなかつたことも、  
反かえつて嬉しい気がするのです」

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、  
鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」

「もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急おごそかに厳な顔になって、  
じつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしま  
おうと思つていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望のぞみ  
も持つていまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈はずだ。

ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな」

「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩こもっていました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇あわないから」

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していました。急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おお、幸さいわい、今思い出したが、おれは泰たいざん山の南ふもとの麓ふもとに一軒の家

を持つている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いている

だろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。

# 青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1989（平成元）年5月30日46刷

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年7月号

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005年1月7日作成

2013年10月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 杜子春

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>